

## 第5章 トンコロ

### 5-1. トンコロの単位

結婚を契機に肉やロクシ（蒸留酒）のやりとりが頻繁におこなわれていたのは、第3章で見たとおりである。その単位はダジュバイ（兄弟）などと呼ばれるが、それは系譜関係を厳密に適用した固定的な枠組みではなく、女性が結婚するたびに婚資の調達／分配の必要に応じて結ばれる柔軟なネットワークのようなものだった。だが、「ダジュバイ」という言葉は、結婚の単位や兄弟だけを指すとは限らない。「ヤージョ・キム・コ・マンタ (yajo kim ko man.ta P. ひとつの家の人)」という言葉とともにトンコロ (tonkolon P.) という<sup>1</sup>サンガ (saŋa P. 祖先霊や祖先霊の住む世界の諸霊の総称, 以下祖先霊たちと訳す cf. sāga N. すべての部分が含まれている、 sānge N. 供犠) への儀礼<sup>2</sup>の単位としても用いられている。

トンコロは、サンガ（祖先霊たち）に対して子孫を病気にしないよう説得する (bujhausa P. cf. bujhāunu N.) 儀礼である。M村やその周辺に暮らすブラジャの人びとは、サンガが原因で人が死んだり、病気になったりするとトン (ton? C. 囲い込む) なくではいけない、とも言う。トンは一般に囲い込む、巻くことを意味するが、日が昇って明るくなることを言うトン (thon? C.) やどらを叩くこと、獲物を狩り立てることを示すトンコロ (thonkolon C.) と発音が類似した言葉である。人びとは、儀礼のトンコロにそれらを重ね合わせ、イメージを構成する可能性を持っている。

上記のような名で呼ばれるトンコロをおこなう親族の単位だが、人びとはそれを「父系を4, 5世代ほど辿った関係にある家族」だと言う<sup>3</sup>。そこに見られる父系の系譜関係の範囲は、婚資の調達／分配の単位と比べると平均して狭くなっている。だが、詳しく調べてみるとトンコロの単位の父系的な系譜関係の広がり、4, 5世代に限定されているわけではない。それについて訊ねてみた。すると「親族の人数が増え、トンコロをおこなうのに家が狭くなれば、世代をそれほど経ないで分裂してもよいし、また逆に家に収まればもっと世代を経ても共同でトンコロをおこなって構わない」。筆者が質問した村人に共通する答えだった。

実際には家の広さ以外の原因でトンコロの単位は分裂することがある。結婚後、妻の実家に同居している夫（ガル・ジュワイン）の家族が、「夫の親族の家は遠い」と帰らず、1家族だけでおこなう例があった<sup>4</sup>。親族内のお互いの家の距離もトンコロをおこなう単位の分裂の原因になる。

父系の系譜を辿る、ということで女性のトンコロへの参加がどうなるのか気になる、儀礼の当日、数人の男女に訊いてみると、子供（男女は問わない）が生まれるまでは実家で、子供が生まれると夫側親族のトンコロに参加するようになる、とのことだった。そこで、子供を持たない女性の場合、年配になっても実家のトンコロに参加するのか、再び訊いてみると「婚資の支払いが終われば婚出先でおこなう」とい

う答えが返ってきた。このように複数の基準が使い分けられ、女性の参加は決められているようである。

トンコロンでは父系の系譜が重視されるが、女性が「排除」されるわけではなく、その単位は父系の系譜と結婚という縁組の2つの軸によって形成されている、と言える。以下では、そのようなトンコロンの単位を結婚の単位や親族一般と区別して「父系親族」と呼び、議論を進めていく。

## 5-2. パンデとマーパンデ

人は眠りにつき、夢を見る。夢とは、睡眠によって魂が身体から抜けたとき、魂が行き先で見た一つの世界だとされる。その世界に、ラーディン (lah.dij C. 精霊、神)<sup>5</sup>と呼ばれるシミ (地神) の子であり、使いでもあるトリやサイ、ゾウ、色白の女性など様々な形象を持った者たちが現れる。そのようなラーディンに夢で出会い、それらを従えた者はパンデ (シャーマン) となり、ラーディンを介してシミの力を使いラン (lan C.) やシェナ (syena P.) と呼ばれる悪霊を追い払い、病を治療する力を得る。

もし夢で出会ったものが言うことをきかなければ、それらはラン (悪霊) であり、その夢を見た人を病に陥れる。村の最古のパンデで110のラーディンを持つというスタム氏は「もともと115のラーディンを持っていたが、5つは悪さをするので手放した」と言う。また「ウシやスイギュウの夢は、ランにしかならない」とも言う。

ラーディンを夢で見ても「本当にパンデになったかどうかは、しばらく様子を見ないといけな。何人も病人を治せるようだったら、本当のパンデだ」。治療の力が他の人びとに認められるようになったとき、はじめてその人は、パンデと呼ばれるようになる。パンデになれば、夜ごと治療の依頼に訪れる人びとを迎え入れなくてはならない。

人が病になる原因には、身体の不調が原因 (jīu ko kāraṇ N.) の病、ルッディ (rūḍhī N. 疫病)、ニン (毒) などがあるが、多くの場合、魂が身体から離れたときに、ランに連れ去られてしまうことが原因だとされている。

魂は、9フンサ (hənsa P. cf. hos N. 意識)、9サートウック (satuk P. cf. sāto N. 意識、子供が恐怖から失神する症状)、9グナース (gunas P. gunāso N. 後悔)、7アユ (ayu P. cf. āyu N. 寿命) と言われ、ひとつではなく複数あるものとして、あるいは、いくつもの部分や層から成り立っているひとつのものとしてイメージされている。また、眠っているときだけではなく、道で躓いたり転んだりしたとき、恐ろしい思いをして気が動転したときにも、それらは身体から離れるとされる。

ランには、第二部第2章でふれたようなリイジャア (riʔ jaʔ P. 人に腹痛をもたらす)、チャクジャア (cyak jaʔ P. cf. cyak : 暗いこと) やギャンジャア (cf. gyan C. 大きい、長い) のようなトラの形象を持つもの、他にクワラン (kwalan P. : 影の悪霊)、マルワ (marwa P. 死霊)、ジャンブル (jyambur P. つむじ風、これによって人は熱が出て下痢する)、ラシやジャソ (rasi P., jaso P. 邪視)、その他にマサン (masan P. 悪霊の一種で土や水などにいる cf. masān N. 墓地)、ビル (bir P. 最も力の強い悪霊 cf. bīr N. 勇者)、スンニャ (sunnya P. 人を眠くする悪霊)、カットコ (khatko

P. 怪我をした場所に憑く悪霊)、コピ (kopi P. bui kopi, jal kopiの2種類, 人の身体を腫らす悪霊)、バユ (bayu P. マガールという民族から来たとされる死霊) などのランが、第6章で述べる天上、地下世界の超自然的存在に加えて人びとに病や死をもたらす。

パンデは、これらのランから人びとのサートウックを救い出すため、まず、パンデの妻とも言われるリン (rij C. 片面太鼓)<sup>6</sup>を棒で叩きつつ、自らのサートウックを飛翔させる。そして、ラーディンを呼び寄せる。

パンデはラーディンやシミの協力を受けながらランたちを追い込み、シビリン (si.bi.rij C. 竹製の漁具) やウィン猟の網などを使いながら捉える。そして、それらを追い返し、ときには地下の世界に埋めてしまう。同時に、連れ去られた人の魂を連れ戻す。ときには、人の魂の代わりにニワトリなどの血を捧げることもある。このような治療儀礼に報酬はなく、パンデにとって夜中延々と続ける治療の負担は大きい。

パンデによってサートウックが取り戻されても、病気が治らないようなら、その病人の他のフンサ、サートウック、グナス、アユが連れ去られていないか疑われ、診断される。それで治療を重ねていっても良くならないようなら、身体の不調も疑われる。結局どうしても治らなかった病は、ダサ (dasa P. cf. grahadaśā N. 悪い星回り) に掛かったから仕方がない、と言われる。

このように夢見と治療の成否で判断されるパンデになる可能性は、誰もが持っていると言われるが女性のパンデに筆者は出会うことがなかった。1990年に人口約350人のM村にはパンデが17人いたが、すべてが男性だった。女性のパンデも隣村にかついていたと言われるが、村人たちがあげるその人数は、過去を含めて2, 3人にしかならない。

このようなパンデのなかでも、トンコロンを執りおこなうパンデはマーパンデ (ma pande P. cf. ma- C. 偉大な cf. mahā N. 以下大シャーマンと訳す) やナラパンデ (nala pande P. cf. nala C. 地下世界, cf. narak N. 地獄) と言われ、特別視される。マーパンデになるためにはラーディンを夢で見て、それを従えるだけでは十分でなく、トンコロンについての知識も必要になる。その知識はトンコロンの際、弟子パンデがマーパンデに付き添いながら教えてもらう。父親から息子に、兄から弟に、父系のオジからオイへ、舅から婿に教えられる。

マーパンデにトンコロンの司祭を依頼している人びとは、年に一度農作業や屋根の葺き替えなどマーパンデが望む労働奉仕をしなくてはならない。そのような自らの父系親族のトンコロンを依頼しているマーパンデを、人びとは「自分のパンデ」と言い、普段の治療儀礼も「自分のパンデ」に頼むことが多い。

### 5-3. トンコロンの準備

穀物の収穫の時期 (9, 10月) が過ぎ、冬のモンシール月 (mañsir N.) からマーグ月 (māgh N.) (11月中旬から2月中旬) になると、トンコロンをおこなう父系親族の各家族が示し合わせ、一斉に大量のハン (どぶろく) を仕込み始める。その量、1軒おおよそ20リットル。実際にそれを飲むときには水を入れ、糟を漉すことになるので飲み物としての量はその2, 3倍になる。ある父系親族の男性は、自分たちは7軒で

200人分のハンを用意すると言う。

ハンが用意されるのは、マーパンデ（大シャーマン）をもてなすためであり、また儀礼を観に訪れる人たちに振る舞うためでもある。儀礼を主催する父系親族にとっても、夜通しおこなわれる儀礼の最中に、空腹を埋めるために必要なものである。トンコロンを執りおこなう父系親族には、儀礼が終わるまで食事が許されないからである。なお、ハンの一部は蒸留され、マーパンデをもてなすためのロクシ（蒸留酒）が作られる。

ハンの発酵が進んできたら、マーパンデのところまで行き、儀礼をおこなう日取りを決めてもらう。それからライロ (ləy lo P. cf. ləy C. 自分, loʔ C. 葉) という木の葉が儀礼用に定められた葉サーロ (sah lo P. cf. sa C. 選ぶ) として採ってこられる。また一晩中皆で暖を取り、大量の食事を作るための薪が父系親族共同で大量に集められる。

以下に1995年12月14日におこなわれたT家（キム）のトンコロンの様子を示す。

トンコロンの日の朝、儀礼を主催する父系親族のT家<sup>7</sup>の若者が、マーパンデの家に向かった。若者は早いときには午前5時頃に行くこともあると言うが、今回はパンデの家が少々遠いこともあって到着が午前10時頃になったと言う。若者は「リン（太鼓）とマラ (mala P. 大珠の数珠 cf. māla N. 首飾り) は私たちが連れて行きます。晩に来て下さい」とマーパンデに告げ、それらを儀礼がおこなわれる家まで持ってきた。リンはパンデの妻だと人びとは言う。

儀礼は父系親族のなかで最も大きい家屋でおこなうと言われるが、実際にはそうとも限らない。マーパンデ本人の家でおこなうのは、完全な禁忌とされているし、病人のいる家も避けられる。また「小さい赤ん坊がいるから自分の家ではやりたくない」と訴える人もおり、その希望は受け入れられていた。

昼から夕方にかけて、T家の人びとは、それぞれハンの他に親ブタ1頭、トウモロコシ、コメ、ヒエを持ち寄った。トウモロコシは4パティ（約18L）、コメは5パティ（約23L）、ヒエは1パティ（約4.5L）必要だと言う。また、子ブタ1頭と子ヤギ1頭も父系親族のひとりが持ってきた。これは各家族持ち回りで提供する。父系親族によってはヤギが省略されることもある。

夕方5時過ぎにマーパンデが親族数人を引き連れ、妻であるリンが待つ家にトンコロンを執りおこなうためやって来た。到着すると10分ほど、ピンネ（縁側）で話をする。他の家のトンコロンをおこなう日取りの相談らしい。

一行は、簡単な挨拶のあと家のなかに通される。腰を下ろすとロクシ、鶏肉の炒め煮、ハン、コメのアム（ご飯）が順次出され、1時間ほどもてなされる。トンコロンを主催する父系親族のメンバーは、トンコロンの最中ヤギやブタを解体・調理することは許されないで、これらの料理は他の父系親族のメンバーがおこなう。

マーパンデと一緒にバンパンデ (ban pande P. 森のパンデ) と言われる人たちが招き入れられた。バンパンデはトンコロンで用いるカニや葉を森に採りに行った人のことで、トンコロン主催の父系親族が他の父系親族に所属する2人に頼む。彼らにもマーパンデと同じロクシやハン、肉、コメのアムが出された。

## 5-4. トンコロンの過程

陽が沈み、6時頃になると人びとは慌ただしく家の戸口に薪を集め、火を焚く。トンコロンではいつものように家の奥にある囲炉裏では調理しない。戸口で夜中マーパンデ (大シャーマン) やトンコロンを観に来た人びとに供する肉の炒め煮を作る。翌朝には昼の儀礼で供えられるアム (ご飯) もそこで炊く。

7時頃にはマーパンデの食事は済み、こうした夜のための準備も一段落つく。マーパンデは席を替え、リン (太鼓) を叩きつつ、おもむろにラーディンを呼ぶ文言を唱え始める。それが終わると、T家の人びとのなかでダサ (cf. *daśā* N. 凶の日、凶の時期) やグラハ (cf. *graha lāgnu* N. 悪い星回りになる)、ベター (*bethā* N. 病苦) がついている人を探し出す。そして、それらの凶兆性を断ち切るためにニワトリを手元に持ってこさせる。

マーパンデはニワトリを掴み、選ばれて来て腰を下ろしている人の背中後ろに持って行き、グルグルと円を描くように回す。そしてニワトリを下に降ろすとその首筋に水をかける。水はパティ (*pātī* N. 神に供えられた花) の葉を水差しに浸し、それを取り出し滴らせる。水をかけられニワトリが、ブルツと震えたらラン (悪霊) が受け取ったしるしだと言う。ランには「これからは、人を見ては駄目だ。ニワトリを見ていなくてはならない」と命じる。ニワトリが震えるのを確認すると、家の人はそのをピンネ (縁側) に持ち出し、首を落としたあと、外に投げ捨てる。そして首を拾い、庭の片隅に水とコメ粒と一緒に地中に埋める。ニワトリの残された身体はカゴに入れておく。首を地面に埋め、身体をカゴに入れておくのは、地下からも地上からもランがニワトリを持って行けるようにするためだと言われる。家の外に向かって投げたニワトリをすぐに拾ってはいけない。そうするとランがついて来る。

このとき家の外では、儀礼を見に来た他の父系親族の人たちに、バナナの葉と竹ひごが配られる。全員で80人ほど来ている。貰った人たちは、銘々折りたたんだ葉の端を竹ひごでとめ、容器を作る。ハン (どぶろく) とブタ肉にトリ肉も混ぜた炒め煮が一斉に振る舞われる。ブタは昼間のうちに解体、調理されたものだ。ハンは用意したものがなくなるまで何杯でも、肉は葉の皿に入れられたものが一度だけ振る舞われる。

さあ、さあ飲んだ、飲んだ。オーイ、こっちにもくれ、まだ来てないぞ。

大声が家の外のあちこちで飛び交う。儀礼をおこなっている家の周りには自家製のロクシ (蒸留酒) や肉の炒め煮、ドーナツ、果物などを売る人たちが村の内外から集まって来る。人びとは飲み、食べ、歌い、踊る。こうした家の外の宴を、人びとは疲れ眠るまで、人によっては一睡もせず朝まででも続ける。

午後8時頃になり、ダサを切るのが済むとマーパンデは再びリンを叩いてシミ (地神) の力を貰い、まず、ハルディン・タギディン (*harudīṅ tagidīṅ* P.) と呼ばれる乗り物を呼ぶ。そしてトンコロン主催の父系親族の人びとやサンガ (祖先霊たち) への供物であるニワトリ、ブタ、ヤギのサートウック (魂) をそこに乗せて行く。エレン (*elen* P. パンデではない普通の人びとが暮らす地上の世界。パンデが知る物事の

内面的、本質的な世界とは異なる外面的、表面的な世界)を旅立ち、ランカ (lanka P. 天上の世界)、サガル (sagar P. 地下、地中の世界) へと飛んでいく。

マーパンデのサートウックの旅は一晩中続けられる。その旅の行程はマーパンデの文言を通して周りの人びとに伝えられる。それは旅の風景と旅先で出会うサンガとの交渉についての語りである。壮大な旅の情景を楽しむために、マーパンデの周りには年配の男女が集まり、皆熱心に話に聞き入る。

途中で、パンデの声が小さくなる。何があったのか訊くと、サートウックが皆集まっているか確認をしたところだと言う。

パンデの声は再び大きくなり、旅の行程に戻っていく。途中、その行く手を阻もうとするランに出会うが、パンデは負けてはいない。シミから授かったその力で、ランに妨害しないよう命じていく。

午後10時頃になり、ランとの戦いや交渉が一段落すると、リンにシクリ (sikri N. 糸)をつける。T家の最年長の男女のために用意したシクリをリンの両端につけ、他の人の分は真んかにつける。あとでパンデや人びとのサートウックがエレンに戻ると父系親族はシクリを貰える。これは、身体を守るためのお守りになると言われ、人びとは手首に巻く。シクリは大人の分だけしか用意しない。T家の21歳の青年はまだ早いと言われる。このシクリをつけるのは、年を取った人があとどのくらい生きられるのか占うためだ、と言う人もいる。

夜中の1時過ぎ、マーパンデはリンを叩くのをやめ、「さあ、レンジャア (renja? P. 若者) たちよ」と叫ぶ。そして、その場に來たやる気のある男性 (実際には若者とは限らない) にリンを渡して、自らは休憩に入る<sup>8</sup>。

1人の男性がマーパンデ役に、もう1人の男性が女装をして裏声を使い、女性の病人を演じる。そして、他のマーパンデが普段おこなっている治療儀礼の物まねをおこなう。

女性の病人役をつとめる男性が、股間が痛いのを何とかして下さい、と言ってマーパンデ役ににじり寄っていく。マーパンデ役は、女性役に覆い被さり、リンを持ったまま腰を上下する。性的な冗談を絡めた物まねの笑劇が繰り広げられる。このときには、家の外で飲んだり、歌ったりしていた人たちもドツとなかに押し寄せ、劇の周りは観客でぎゅうぎゅう詰めになる。

一時間ほどこの劇が続いたあと、多くの見物人たちは家路についた。だが、マーパンデによる儀礼はまだ終わらない。老齡のマーパンデを見習いマーパンデが補助をして、交代で朝まで延々とサートウックの旅を続ける。マーパンデが1人で仮眠もとらずに早朝4時頃まで続けることもあるし、仮眠をとって6時頃までサートウックの旅を続けることもある。

朝日が昇りはじめると、一時休んでいたT家の人びとや手伝いの人たちが起き始め、昼におこなう供儀の準備を始める。T家以外の人には家の戸口でアムを炊き始め、また家の外で子ヤギや子ブタの頭を落とし、残された胴体部分を解体、調理し始める。他にも前日のうちに取っておいたカニを焼いたり、穀物の脱穀に使う杵、箒などを用意したりと忙しい雰囲気にも包まれる。

トウモロコシとヒエのアムを炊いているあいだに、トンコロンに使われる特別な葉、サーロを16枚重ね、束ねておく。アムが炊きあがると、そのサーロのなかにトウモ

ロコシのアムとウコンを入れてくるみ、竹ひごを縦に刺して留める。これをジャール (jhyar C. 乾かして保存する) と呼ぶ。また、この他に重ねたサーロを縦に丸めて竹ひごを横に刺して留めたオン (onj P. cf. onh C. 開けられた, onj C. 矢筒、ペンダント)、表面が葉の裏になるように葉を合わせて重ね、竹ひごを縦に刺して留めたドン (cf. dhon C. 叩いてゴミをより分ける) を作る。

さらに、ジャンブ (jambu P. 植物の1, cf. jambu N. ジャッカル) という名の木の皮をサーロで丸く包み込む。生のヒエ粒も同じように包む。これらを、クサ (khusa P. cf. khus- C. 囲う) と呼ぶ。

さて、いよいよサンガへの供儀の準備ができると、供物はすべて早朝までアムを炊いていた家のなかの戸口に並べられる。そしてトンコロン主催の父系親族のメンバーは老若男女を問わず全員が家のなかに入り、しゃがみ込む。やむを得ない事情でその場に居合わせることができない成員がいれば、その人の服を父系親族の他の成員が代わりに羽織る。

マーパンデは、ニワトリと束ねたサーロを蔓で縛り、それを片手で持ちながら文言を唱えつつしゃがんでいる人びとの頭にそっと当てて廻る。ついで、切断され葉で包まれた子ブタ、子ヤギの頭も人びとの頭に当てる。そして最後にコピア (kopia P. 小型の竹を編んだ容器) に盛ったヒエのアムの上に、直立した姿のまま焼き上げたカニを乗せ、それも頭に当てる。そのように人びとの頭に数々の供物を当てていくのは、人びとの身体から連れ出していったサートウックを再び体のなかに入れ直しているのだ、とマーパンデは説明する。

ただし、この際戻されるのは沢山あるサートウックのうちの一つだけで、それ以外のサートウックは、あとでトンコロン主催の父系親族だけで食べる鍋のアムのなかに入れられ、それを食べると元に戻るのだと、トンコロンに参加したM村のある男性は言う。

頭からサートウックを戻し終え、マーパンデが許可すると、手伝いの人たちは戸口においた供物を家の前庭に一斉に運び出す。そしてサートウックを戻すのに使った子ヤギと子ブタの頭、コレ (khore P. 密に編んだ竹の器 cf. khori N. 小さな器) に入れられたアムとカニも供物として外に並べられる。

供物は「人が普段食べているものはすべて必要」だとか、「サンガが欲しがっているものが揃っていないと必要はない」と言われる。何か欠けるとサンガは人をすぐに殺してしまうとも言われる。

供物は家の前庭に、西の方角へ向けて並べられる。一番奥にはリンを設置する。近くにある木やそれがなければ棒を打ち込むなどして、リンにつけられている鎖をそこに掛ける。リンの手前には、左手 (南側) <sup>9)</sup> に生のヒエを入れた高さ4, 50cmの竹編みの容器、右手 (北側) に生のトウモロコシ粒を入れた容器を置く。トウモロコシの上には、トウモロコシのアムを炊いたお焦げを一切れ乗せる。このふたつの容器の真ん中にカニを炊いた鍋を置く。

ヒエを入れた容器のすぐ横 (西側) には、ヒエのアム (ロアム ro.ʔamh C. 柔らかい穀物食) を炊いた鍋、手前 (東側) にはブタ肉を煮た鍋を置き、トウモロコシを入れた容器の手前にはヤギ肉を煮た鍋を置く。そして、そのブタ肉とヤギ肉を煮た鍋の手前にトウモロコシのアム (マーアム ma ʔamh P. トウモロコシのご飯) を炊いた鍋

をひとつずつ、計2つ並べる。2つの鍋のちょうど真ん中にフルイ（上段）とザル（下段）を二段に重ねて置く。フルイとザルにはトウモロコシのアムを盛り、サーロで蓋をし、さらにその上にシャクロ (syak lo P. cf. syak C. 生きた) という野生のバナナの茎でつくった容器 (kopak P.) にカニとティサガ (tih saga P. 水辺に生える食用の野草) を入れたもの、パンデがトンコロン主催の父系親族の身体にサートウツクを戻すとき、ニワトリの足などを縛った蔓トレラ (to re la P. cf. la C. 紐) を乗せる。

これらを並べたら、その手前に杵を横向き（南北）に置き、さらにその上に屋根を葺いているカヤを一掴み引き抜いて乗せる。杵の右端の手前には子ヤギの頭を葉に乗せて置き、左端の手前にはブタの頭を同様に置く。ヤギの頭の手前には、ヒエのアムを入れたコレを置く。

ヤギとブタの頭のあいだには、右からオン、トウモロコシのアムが入ったジャール、ジャンプの皮を葉で包んだもの、そしてまたジャール、オンを並べる。そしてその手前、真んかにジャールを2つ広げ、その左側にはオンを、一番左にはドンを置く。杵の手前にサーロの葉を様々な形で束ね、留めたものがずらりと並ぶ。その真んかに広げたジャールは、そのなかに入っているトウモロコシのアムとともに2段重ねにし、下段にブタのスネ肉とマリヤン・マイ (malyanj may P. cf. malam N. 火葬場への行列) と呼ばれる串刺しの肉を入れる。そして上段には、ヒエの粒を葉で丸く包んだクサを解き、生のヒエを出してトウモロコシのアムと手前に置いてあるブタとヤギを煮た鍋からつまみ出した肉と一緒によく混ぜ合わせる。

マリヤン・マイは竹ひごを裂いて二股にし、順に肉を刺したもので、二股の竹ひごは葬儀の際遺体を乗せる棒を表している、ある古老は言う。その割れていない根元に肉片を1つ刺し、そこから左右にひとつずつ肉片を刺していき、さらに肉片、肺、肉片、肝臓、肉片の順で両方に指す。そして2つに割られ広がった竹ひごの先端を合わせ、腎臓をひとつ刺して留める。肉や内臓の断片は全部で14になるが、竹ひごに肉片が刺さっている点の数は束ねたサーロの枚数と同じ16になる。

こうして供物の準備が終わったら、その前にマーパンデは座り、オンドリのからだをつかみ手前のアムと肉、ヒエを混ぜたものを食べさせる。マーパンデによれば、ニワトリがそれを食べるのは、サンガが供物を受け入れ、喜んでいるしるしである。それを確認しながら、マーパンデは供物をサンガに与える旨の文言を唱える。それが終わると、オンドリの羽根を数本むしって手前のアムに突き刺し、オンドリをつかみ押さえつけたところで、トンコロン主催の父系親族以外の方が右足、右羽、首を鎌で切断する。そのオンドリの首から流れ出る血をマーパンデは、手前のアムに滴らせ、オンドリの屍を西の方角に掛けられているリンの向こうまで投げる。ついで、メンドリを掴みその嘴をオンドリの血で染まったアムの手前に持っていく。メンドリがそれを食べると、オンドリ同様首や羽を切り落とし、リンの方向に放り投げる。

その後、サンガに「斯く斯く然々のものを送ったぞ」と告げ、ニワトリの食べ残したアムと肉を手で掴み、ニワトリを投げたのと同じ方向に投げる。そして、手前に置いてある水差しの水で手を洗い、その場を立つ。

供物はすぐにその場から移され、調理していない穀物と肉の一部は、マーパンデへのお礼として支払われる。鍋に入っているアムは、その場でトンコロン主催の父系親



族が揃って食べる。手伝いをした人たち、最後まで見物していた人たちには、ザルやフルイの上にあるアムをサーロの皿に盛って配る。これでようやくトンコロンを主催した父系親族の人びとは普段どおり、自宅で調理して食べることが許される。残ったハンがあれば宴会が再開され、夜まで続くこともあるが、夜通し司祭を務めたマーパンデはその日のうちに家に帰っていく。

### 5-5. トンコロから現れるもの

ここまで見てきたトンコロンは、一体何の、どのような過程だったのだろうか。

トンコロンは、まずそれを主催する父系親族のパンデではない普通のレンジャア(若者)がマーパンデ(大シャーマン)の妻、リン(太鼓)を連れ去ることから始まる。トンコロンは、マーパンデとリン夫婦の物語としての側面を持つ。

マーパンデは、トンコロンが執りおこなわれる家でリンと再会を果たし、それを再び自らの手元に引き寄せる。だが、夜中マーパンデの疲れが頂点に達したとき、リンは再びレンジャアの手に乗せられてしまう。レンジャアは、リンとともにパンデの治療儀礼を真似た性的な即興劇を繰り広げる。マーパンデは、再びリンを取り戻し、旅路に戻る。そして、旅の終わりにリンに面と向かって(供儀でリンの方向に)様々な言葉を投げかけ、沢山の供物を贈り、2人一緒に家へ戻る。

マーパンデは、経験を積んだパンデが、父や兄、オジなどのマーパンデに教えられてはじめてなれるもので、一般にレンジャアには務まらない。通常は、同一父系親族の最年長パンデがマーパンデになる。そうしたマーパンデは、見習い中を除けば50代から90代の年齢で、ブド(budho N. 年寄り)と呼ばれる世代に属す。ブドはもう仕事が一人前にできない、しかし物事をよく知っているというニュアンスを持つ。結婚して40代くらいまでの男性はカルマイと言ひ、これは仕事ができる人、一人前の尊敬されるべき大人という意味でも使われる<sup>10</sup>。レンジャアは、14, 5歳以上で結婚前、あるいは子供を持つ前の男性のことを指している。レンジャアをティタ(ṭiṭā N.)と呼ぶこともあり、「ティタはブドに比べて嘘つきでいい加減」だとか、「ティタがブドに重い荷物を持たせてけしからん」などのようにブドと対照的な地位や世代に対して用いられる言葉である。また、「ティタ」は昔であれば娘をさらうと言われるような年齢層でもある。

レンジャアはマーパンデから見て年齢的に一番遠い場所に位置する<sup>11</sup>。またレンジャアは儀礼で供物を準備する際、知識の豊富なブドが命じるままに、ブタを解体したり、重い穀物を運んだり、小間使いのようにせつせと働く。レンジャアは儀礼における役割を見ても、儀礼全体を司るマーパンデとは対照的な位置にある。日常的な仕事という観点から見れば、レンジャア、ティタもブドとともにカルマイのように仕事ができないという位置だが、「まだできない者」と「もうできない者」という対立的な差異を含んでいる。レンジャアが、ブドであり傑出したブドの能力、知識を持つマーパンデの代わりを演じる場面は、転倒儀礼のかたちをとっていると言える<sup>12</sup>。

そのなかで、普段は隠されている様々な可能性の世界が現れる。男性が女装をすること、女性が股間を人に見せること、マーパンデが夜、病人(多くの場合子供)の治療の依頼に来た女性と性的な冗談を言い、性的なやりとりをおこなうことなどは、日

常的な思考の枠外の行為である。そこでおこなわれる行為が例外的であればあるほど、周囲の笑いを誘い、好奇心を刺激する。当たり前のことしか見せられなければ、そこに開放的な雰囲気も生まれず、見物客も自然と少なくなる。

このレンジアの性の力を使った反乱にも見える転倒は、しかしマーパンデの指示であっさりと終わりを告げる。そしてレンジア対ブドという二項対立や以下のような社会的な枠組みが暗黙に示され、その逆転は許されないことが、その可能性を示しつつ否定することで逆説的に明らかにされる。

### レンジア / カルマイ / ブド

マーパンデが戻ってからは、リンとともに贈与あるいは交渉の旅が続き、最後にはリンに向かって言葉と供物を投げかける。こうして、「レンジア」は「ブド」に替わることができないこと、普通のエレンに暮らす人間がパンデの替わりになれないこと、そして性の力が、贈与や交渉に取って代わることができないことが示され、トンコロンは幕を閉じる。

また、トンコロンは、食事についての儀礼でもある。トンコロンの最中、トンコロンを主催する人びとはいつものように料理することが許されない。アム（ご飯）を食べることも許されない。そのあいだ、普段料理が作られない戸口で火が焚かれ、普段そこで料理しない父系親族の外部の人間が料理する。また、トンコロンを観に来た人たちに、誰彼構わずいくらでもハン（どぶろく）が与えられる。いつものように、ひとつの家族や父系親族だけで食事をするわけでも、相手を選びながら贈答するわけでもない。

結局、ここでも逆転が起きている。父系親族のサートウックがマーパンデと旅立ち、料理と食事が許されないあいだ、普段そこで料理することのない外部の人が料理を担当し、普段家の奥で料理するのが入り口になり、日常的には相互的な関係を期待し、その量も制限を加えている父系親族外の人への食物の贈与を非相互的、かつ無制限にする。そうした逆転のなかで、外部の力が示され、その重要性にも気づかざるを得なくなる。また、外部との親交も深まる。だが、それも結局サンガ（祖先霊たち）が供物を受け入れることで終わりをみる。それまでの過程で、周りすべての人に食べ物を分け与え、生活を取り囲むすべての霊に求めるものを与え、それを受け取ったことが確認されると、残ったアムや肉は限定されたかたちで分配される。マーパンデへのお礼、手伝い、見物客へのアム、そして主催親族には、同じ鍋、釜で炊いたアム。人びとは、それらを口に運びながら、父系親族などの枠組みで制限された食事を再開するのである。

このようにトンコロンは、マーパンデとリン夫婦、ブドとレンジア、性の力と贈与の力、食物の贈与とその制限、父系親族の内と外との物語を含んでいる。だが、まず何よりもトンコロンは、人びとを病に陥れないようサンガ（祖先霊たち）を説得し、言いきかせるための儀礼である。では、それはどのようにして可能になっているのだろうか。

トンコロンでは、サンガの説得のために供物が贈られるが、その供物は「人が普段食べているものすべて」ということだった。それには家の屋根を葺く茅、穀物を搗く

杵など、生活に関わるすべてが含まれている。しかしよく見てみると、その一部は普段食べられていないようなものであり、また普段食べていても、いつもとは違うかたちになっていることがわかる。

それは、ジャー、オン、ドンなどと言われる葉で作られた飾り、自らの尻尾をくわえた子ブタや子ヤギの頭、ザルやフルイの上の盛られたアムである。これらは、一体何を示しているのだろうか。

ジャー、オン、ドンをその形象に注目し、それぞれが何と結びついているのか考察しようとしても、現在まで集められた資料からはよく見えてこない。だが、それぞれの言葉の意味を追っていくと、それらのあいだの関係が見えてくる。Caughley (2000)によると、ジャーは乾かして保存することを意味する。またオン (onh C.) は開けられたということ (ただし、onhは矢筒、ペンダントの意)、ドンは叩いてゴミをより分けることを指す。それがザルとフルイの前に置かれる (ザルとフルイのなかや上に置かれることもある)。これらの飾りの名前の意味を繋ぎ、その近くに置かれたザルとフルイに目を移すと、「乾かして保存、それを開け、叩いてゴミをより分ける」ことがザルやフルイを使う手順であることがわかる (ただし、オンを矢筒やペンダントとして捉えるとそのような一貫性は見えなくなる)。

そう考えると、ザルやフルイとそれにまつわる人の行為の流れが見えてくる。その流れで作業 (料理) を進め、最終的にできるのは、アムなどの食べ物であり、それは皿に盛りつけられる。それがザルやフルイという料理が始められる起点の上に盛られているのである。こうしてみると、この供物は、食べ物を作る作業の流れ全体を示しつつ、最終地点が起点に「接続」されているかたち、と捉えることができる。

そのうえで、供物の配置全体を見てみると、奥の太鼓からまず生の穀物、ザルとフルイ、杵と手前に続き、杵で反転して、その奥に鍋があり、その先にはまた生の穀物という順になっている。これも日常のアムを作るときの作業の流れと重なりながら、起点と終点が「接続」されている、と捉えることができる。

穀物→ザルとフルイ→杵  
鍋←

さらに今度は供物となる子ブタやヤギの頭に目を移すと、ここにも口に入れられた足や尾があり、つまり口という起点に足や尻尾という終点が「接続」されていること、あるいは頭という外部に肝臓という内部が「接続」されていることがわかる。さらに、最後に西向きに置かれたリンに向かって投げつけられるメンドリに注目してみると、オンドリが供犠されて外に滴らせた血をメンドリに食べさせ (なかに取り込み)、最後の供犠が実行される。これも外部に出されたものを、すぐに内部に結びつけ、サンガの方向に投げていることがわかる。

だが、それでは一体どうしてそのような全体の流れを示すのと同時に、起点と終点を結びつけるような形態が、供物となりうるのだろうか。それに迫っていくため、つぎにここまでの記述で省略してきたマーパンデの魂の旅の詳細を見ることにしたい。

## 注

<sup>1</sup> 祖先霊 (kul deutā N.) のことはサンガと呼ぶとM村の人びとは語るが、筆者が理解している限りで、トンコロンに「サンガ」という超自然的存在は登場しない。サンガは祖先霊を祀る供儀のことを指す(トンコロンと同じ)とも言われることから、サンガは、もともと祖先儀礼を指し、そこから転じてトンコロンで祀る超自然的な存在一般を総称してサンガと言うようになったと考えられる。本稿では以下、サンガに対して「祖先霊たち」という訳を当てる。なお、祖先儀礼は、トンコロン、サンガの他にマーカーム (ma kam P. 大きな仕事) とも呼ばれる。

チトワン郡西部のある村人の話では、サンガには、マーサンガ (ma saṅa P.) とツォーサンガ (co saṅa P.) があり、マーサンガは12年ごとに1晩中かけておこなうものだが、ツォーサンガは1年か半年に一度簡単におこなうものだ、ということだった。さらに「マーサンガは12年に一度やらないと神が怒って災いや病が降り注ぐから、必ずやらないといけない。ツォーサンガは、しょっちゅう病気になるときや、新しい家を建てたときにやるもので、マーサンガでは、(供儀用に) ブタとヤギが必要だが、ツォーサンガではブタとブタの連れ (lapha P.) としてニワトリがあればよい」とされる。

チトワン郡の東部出身の「プラジャ」を名乗る人にカトマンドゥで出会い、訊いてみたところでは、祖先に対する儀礼はカラ (khara P.) と言う、ということだった。また、M村のある人の出稼ぎ (ダーディン郡とゴルカ郡で) の経験談として、プラジャはどの郡に住んでいてもトンコロンで祀る最大の神でありラン (悪霊) でもあるとされるシャ克蘭・ブーラン (syak laṅ bhu laṅ P.) は祀っている、と言っていた。

<sup>2</sup> チトワン郡東部からマクワンプールにかけて祖先に対する儀礼はチョナム (cho.nam C.) と呼ばれている (Gurung 1985, Caughley 2000)。また、ヌワギ (nuwāgī N.) と言われる祖先儀礼もM村の近隣に暮らすプラジャの人びとがおこなっているのを確認した。なお、ヌワギに関しては、この地域の鍛冶職人カーストもおこなっているという話を聞いたことがあり、またヌワギはネパール語の辞書にも新穀や祖先に新穀を供える儀礼として載っていることから広く認められている儀礼であることが窺われる。このヌワギは、バドゥ月 (bhadau N. : 西暦の8月中旬頃~9月中旬頃) の満月におこなわれる。ヘチマ、オカボ、サトイモなどは、ヌワギが終わってから食べることが許されるとヌワギを司るマーパンデは言う。

<sup>3</sup> バクという霊に対する儀礼では女性の系譜が辿られる。マガールの女性と結婚したプラジャの男性を経て、代々女性の系譜が辿られているとされる。

<sup>4</sup> 妻方に居住している夫 (ガル・ジュワイン) の家族は、トンコロンをおこなうときには夫の実家でトンコロンをおこなうことも多いが、妻の実家の親族と共同でトンコロンをおこなうことはない、と言われる。

<sup>5</sup> Caughley (2000) の辞書ではlah.digを月 : lahに関連するものとしているが、筆者の調査地では月そのものではないとされた。

<sup>6</sup> パンデはリンの作り方をシミから夢で教わるとM村のパンデたちは言う。

- 
- 7 トンコロンをおこなう単位が「ひとつの家の人」とも言われるだけでなく、トンコロンをおこなう父系親族（単一あるいは複数）の固有名詞の末尾にも必ず家（キム）という言葉が付けられる。この単位について質問を続けると、「もともとは、ひとつの家で暮らしていた」記憶が想起され、語られることになる。
- 8 そのように他の人にリンを渡すのを好まないマーパンデもおり、その場合はパンデの治療儀礼を模した笑劇はおこなわれない。
- 9 マーパンデによってはヒエとトウモロコシを左右（南北）逆に配置する。
- 10 「もう耳が遠くなってブドになった」などと言う。カルマイについては、ブラ（bhura N. 子供）に向かい「カルマイが話しているのにブラがうるさい」とか「カルマイのものをブラがいじっては駄目だ」のように言う。大人でもより仕事ができる人を、よりカルマイだと言うこともある。
- 11 子供の方が遠いとも言えるが、子供ではこうした劇を演じることもままならないだろう。
- 12 転倒儀礼についてはオジェ（1995（1989））、アガンベン（2003（1995））の議論が権力性や形象への注目などから興味深い。